社会課題を、超えていく。

UR都市機構

（添付資料）

令和8（2026）年11月18日

独立行政法人 都市再生機構

ＵＲ都市機構・子育て世帯の「頼れる人・場所」に関する実態調査

“アウェイ育児”中の約７割が地域の頼れる人・場所を必要と回答
徒歩圏内の頼れる人・場所の存在で地域での子育てに安心感UP
「行ってもいい」と思える場所が複数あることが「心の保険」に

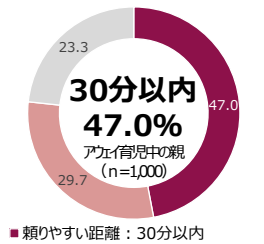
～「住みたい」「住み続けたい」と思える地域の実現を目指す「こどもつながるＵＲ」～

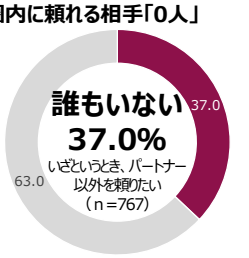
独立行政法人都市再生機構（以下、ＵＲ都市機構）は、子育てしやすい住環境の充実を図る「こどもつながるＵＲ」を始動し、令和17年度までの10年間で100団地10万戸での展開を目指しています。

昨今、核家族化や地域のつながりの希薄化といった社会環境の変化により、子育て世帯が地域とのつながりを持ちにくくなり、子育ての孤立化が課題となっています。そこで今回は、子育ての孤立化の要因の一つと考えられている、自身または配偶者・パートナーの出身地ではない地域で子育てを行う「アウェイ育児」に着目し、アウェイ育児中の小学生以下の子どもを育てる親と、その経験者を対象に、子育て世帯の「頼れる人・場所」に関する実態調査を行いました。今回の調査では、アウェイとなる地域であっても頼れる人や場所の存在により、地域で子育てすることへの安心感が高まることが明らかになった一方で、頼ることのできる相手や、相談相手と知り合うきっかけが不足している実態も明らかになりました。「こどもつながるＵＲ」では、子どもだけでなく、保護者にとっても豊かな地域のつながりを整え、子育て世帯にとって「住みたい」「住み続けたい」と思える地域の実現を目指してまいります。

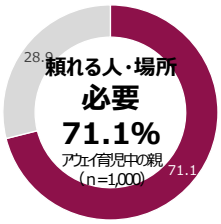
ＵＲ都市機構・子育て世帯の「頼れる人・場所」に関する実態調査　サマリー

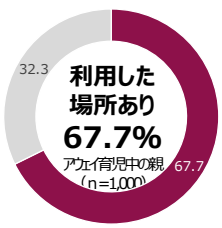
いざというとき「30分以内なら頼りやすい」が約半数
一方、約4割が理想距離圏内に頼れる相手「0人」

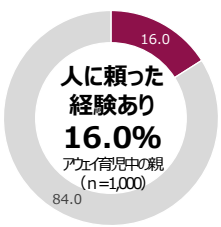




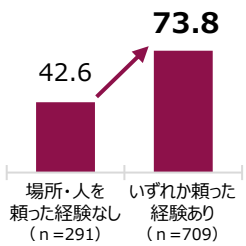
アウェイ育児では地域に頼れる人や場所が必要だが
徒歩圏内で人に頼った経験があるのは16%にとどまる



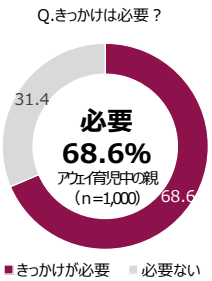


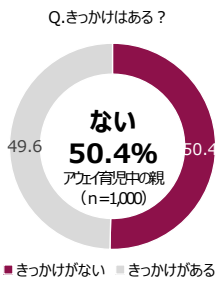


徒歩圏内の人・場所を頼れると
地域で子育てすることへの
安心感が約１.７倍に！

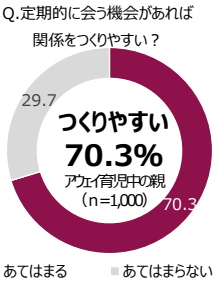


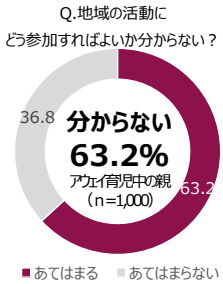
子育て相談ができる相手と知り合う
「きっかけ」必要だが、「きっかけ」はない





定期的に会う機会があれば関係をつくりやすいが
地域活動への参加方法が分からない





「子育て世帯の「頼れる人・場所」に関する実態調査」調査概要

■調査期間：2026年10月13日（火）～10月15日（木）■調査方法：インターネット調査　■調査委託先：楽天インサイト■調査対象：①小学生以下の子どもをもちアウェイ育児（ご自身や配偶者・パートナーのどちらの出身地でもない場所での子育て）中の父・母1,000人　②中高生の子どもをもち、その子どもが小学生以下の頃アウェイ育児を経験した先輩父・母500人※グラフの構成比（%）は小数第2位以下を四捨五入しているため、合計しても100%にならない場合があります。

■ アウェイ育児中の親の約4割が、いざというとき頼りやすい距離感に頼れる人がいない

■ 過半数が近所の人や地域の場所を頼ることができていない一方、約7割が必要だと望む

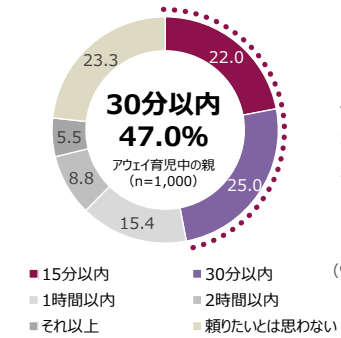
小学生以下の子どもをもち、現在、自身や配偶者・パートナーのどちらの出身地でもない場所で子育てをする、アウェイ育児中の親1,000人を対象に、子育て世帯の「頼れる人・場所」に関する実態調査を行いました。

まず、急な用事や体調不良など、いざというときに、子どものことで配偶者・パートナー以外を頼りたい場合、頼りやすい距離（自宅からの時間）を聞くと、自宅から「15分以内」（22.0%）、「30分以内」（25.0%）と答えた人が多く、約半数の47.0%が「30分以内」を希望しています。また、配偶者・パートナー以外に頼りたいと考えている人に、自分が希望する距離内に実際に頼れる人が何人いるかと聞くと、約4割（37.0%）は「0人」と回答し、頼りやすい距離に誰もいないことが明らかになりました［図1］。

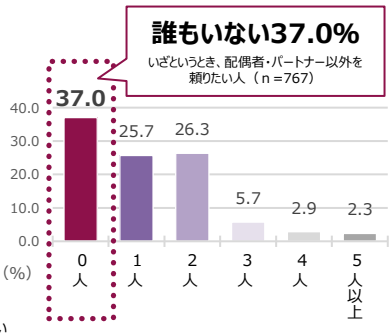
さらに、近所の人や地域の場所などを頼ることができているかを聞くと、「できている」は38.8%にとどまり、61.2%は「頼ることができていない」と感じています。一方で、約7割（71.1%）が地域に頼れる人や場所は「必要だ」と回答しました［図2］。

［図1］いざというときに頼れる相手までの理想距離と人数

①配偶者・パートナー以外でいざというときに頼りやすい距離感

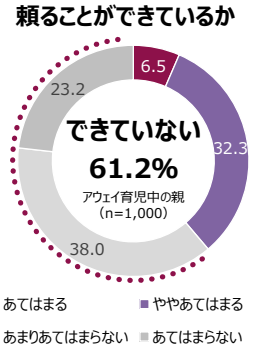


②頼りやすい理想距離圏内にいる実際に頼れる人数

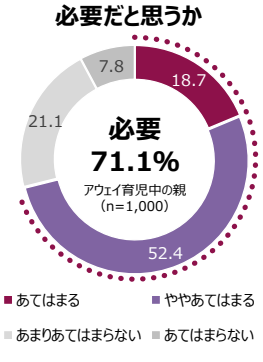


［図2］アウェイ地域での頼れる人や場所

①近所の人や地域の場所を頼ることができているか



②地域に頼れる人・場所が必要だと思うか

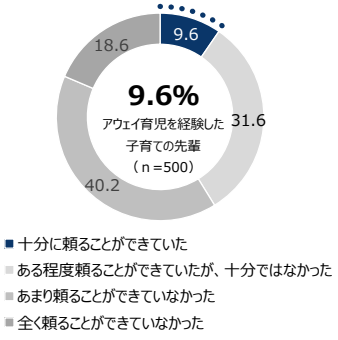


【 アウェイ育児の先輩が振り返る当時のこと 】

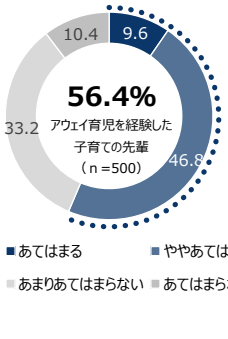
■ 子育ての悩みを一人で抱え込み、近所の人や場所を頼ることができなかった…

現在中高生の子どもをもち、その子どもが小学生以下の頃にアウェイ育児を経験した子育て世帯の先輩500人に、当時のことを振り返り答えてもらいました。当時、近所の人や場所を頼ることができていたかと聞くと、「十分に頼ることができていた」と答えたのは9.6%で、90.4%は十分に頼ることができないまま、アウェイ育児をしていました。近くに頼れる人や場所があれば、半数以上が「もっと気持ちが楽だったと思う」（56.4%）と答え、約4割が子育ての悩みを「一人で抱え込んでいた」（38.0%）と答えています。

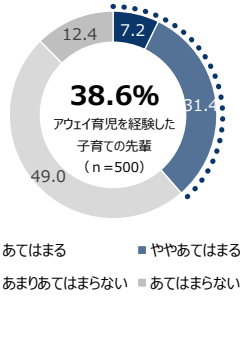
①当時、近所の人や場所を十分に頼ることができていた



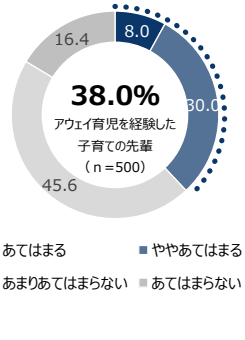
②近くに頼れる人・場所があればもっと気持ちが楽だったと思う



③もっと周囲を頼ればよかったと思う



④子育ての悩みを一人で抱え込んでいたと思う

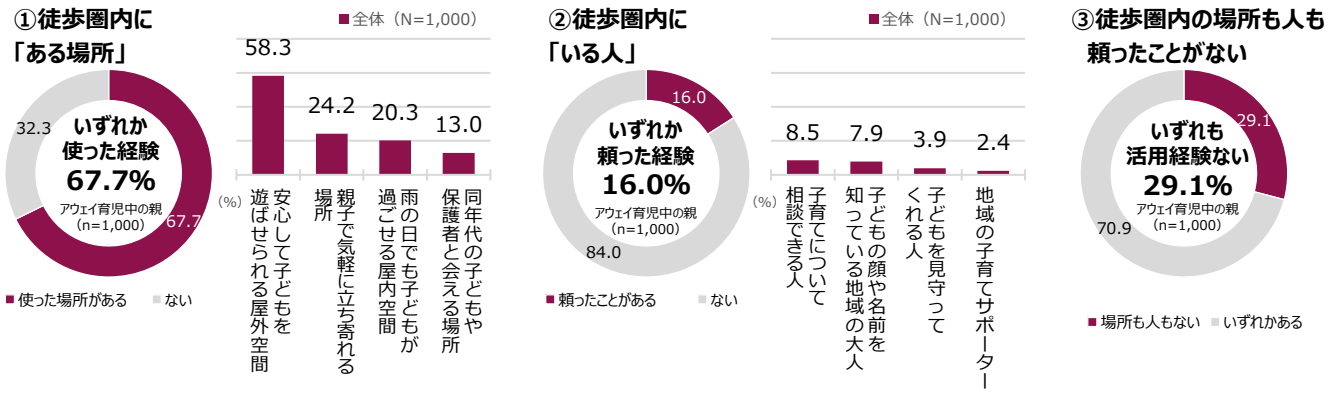


■ 徒歩圏内の子育て施設は約7割が利用しているが、人に頼ったことがあるのは16.0%

■ アウェイ育児をする人の約3割が、徒歩圏内の頼れる人や場所も頼ったことがない

次にアウェイ育児を行う地域の実情を聞きました。自宅から徒歩圏内にあり利用したことがある施設は、公園・広場などの「安心して子どもを遊ばせられる屋外空間」58.3%、「親子で気軽に立ち寄れる場所」24.2%となり、いずれかの施設を利用した経験が「ある」のは67.7%でした。一方、自宅から徒歩圏内の人に頼った経験を聞くと、「子育てについて相談できる人」が8.5%、「子どもの顔や名前を知っている地域の大人」が7.9%、「子どもを見守ってくれる人」が3.9%、ボランティアなど「地域の子育てサポーター」が2.4%と軒並み低く、誰かに頼った経験が「ある」のは16.0%とおよそ6人に1人でした。また、提示した8項目（図３①②）の場所・人いずれも頼った経験のない人は、29.1%と約3割を占めています［図3］。

［図3］自宅から徒歩圏内にある場所を使った経験・いる人に頼った経験（複数回答）



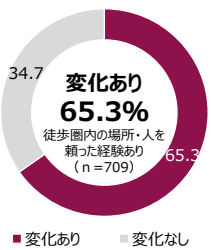
■ 頼ることのできる場所や人の存在で、約3人に2人が変化を実感。

■ 頼った経験のある人は、地域での子育てへの「安心感」が約1.7倍、「地域への愛着」が約1.5倍に！

上記のような場所や人を頼った経験があると回答した709人に、その存在による変化を聞くと、「子どもと外出する機会が増えた」（31.7%）、「子どもを安心して遊ばせられるようになった」（20.5%）、「子どもに友達ができた」（19.7%）、「子育ての不安が軽減された」（19.5%）、「自分にも知り合いができた」（19.0%）など、65.3%が変化を実感しています［図4］。

また、頼った経験がある人では73.8%が「この地域で子育てしていて安心感がある」と答え、地元ではない現住地に対し、62.1%が「今住んでいる地域に愛着がある」と答えています。場所・人いずれも頼った経験のない人と比較すると、「安心感」は31.2ポイント、「地域への愛着」は20.8ポイント高くなっています［図5］。

［図4］徒歩圏内に頼れる人や場所がいることによる変化

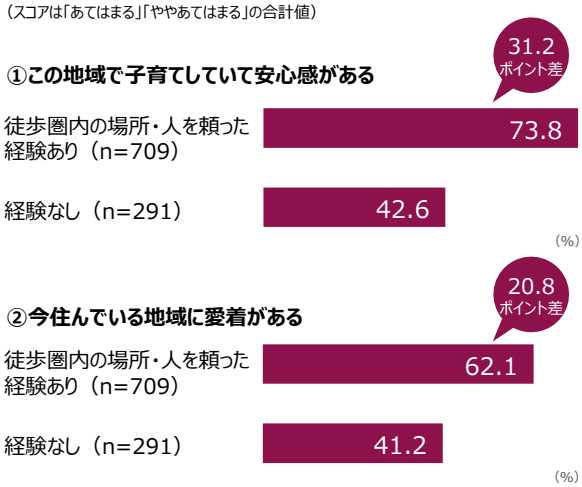


子どもと外出する機会が増えた	31.7
子どもを安心して遊ばせられるようになった	20.5
子どもに友達ができた	19.7
子育ての不安が軽減された	19.5
自分にも知り合いができた	19.0
地域の人と話す機会が増えた	16.6
一人で抱え込むことが減った	14.2
地域に愛着を感じるようになった	9.7
子育てを前向きに楽しめるようになった	8.9

地域に場所・人がある（n=709）（%）

［図5］徒歩圏内の場所・人を頼った経験有無別 子育て中の地域への想い

（スコアは「あてはまる」「ややあてはまる」の合計値）

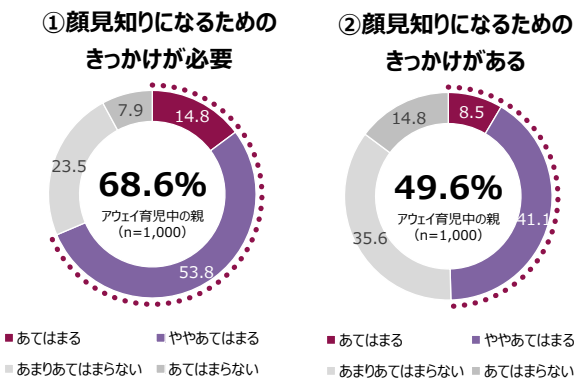


■ 地域の人と顔見知りになるための「きっかけ」が必要、でもそんなきっかけは「ない」

地域に頼れる人や場所があることは、子育ての安心感につながる一方、地域の頼れる「場所」を利用した経験がある人に比べ、「人」に頼った経験がある人は少ないことが明らかになりました。

そこで、アウェイ育児を行っている地域で子育ての話ができる人と顔見知りになる「きっかけ」について聞くと、68.6%が「きっかけが必要」と考えていますが、そんな「きっかけがある」は49.6%にとどまり、なかなかその機会がないことが判明しました［図6］。

［図6］地域の人と知り合える「きっかけ」

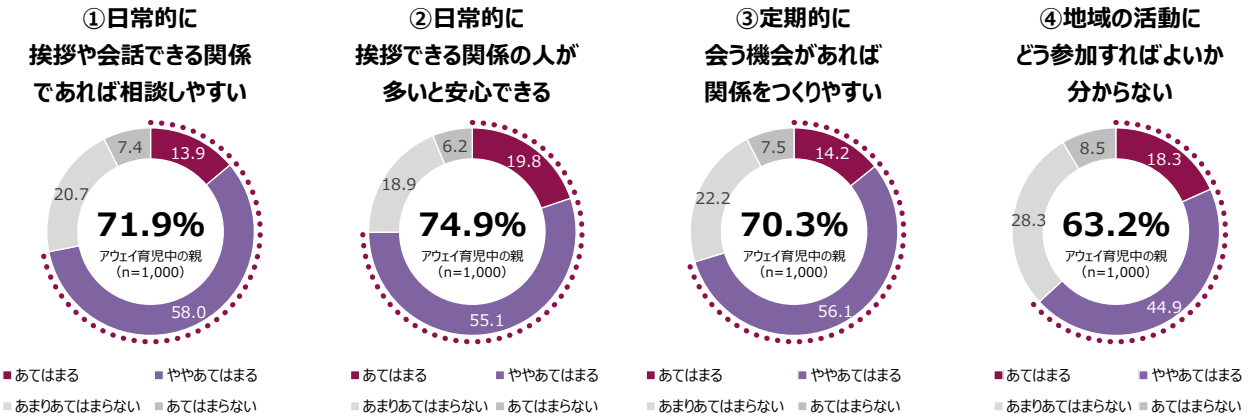


■ 日常的な挨拶や会話があれば「相談しやすい」「安心できる」

■ 定期的に会える機会があれば「関係をつくりやすい」が、地域活動への参加方法が「分からない」

子育てに関して、地域の人や場所を頼ることや地域とのかかわりについて聞くと、日常的に挨拶や会話できる関係があれば、71.9%が「相談しやすい」、日常的に挨拶できる関係の人が多いと、74.9%が「安心できる」と答えています。なお、どちらも子どもの年代によらず、7割を超える好スコア（未就学児の親：「相談しやすい」72.8%・「安心できる」75.0%、小学生の親：「相談しやすい」71.0%・「安心できる」74.8%）となりました。また、70.3%が「定期的に会う機会があれば関係をつくりやすい」と地域の人との関係づくりを望んではいる一方で、実際には、「地域の活動にどう参加すればよいか分からない」（63.2%）と対応できずにいる人も少なくないようです［図7］。

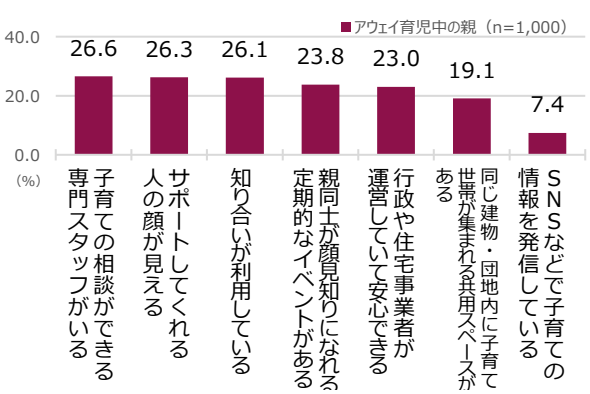
［図7］子育てと地域とのかかわり



■ 「子育て相談スタッフ」「サポートしてくれる人」など人とのご縁が地域を頼りやすくなる第一歩

子育てに関して地域の人や場所をもっと頼りやすくなる要素を聞くと、「子育ての相談ができる専門スタッフがいる」（26.6%）、「サポートしてくれる人の顔が見える」（26.3%）、「知り合いが利用している」（26.1%）が上位に挙げられました［図8］。

［図8］地域の人・場所を頼りやすくなる要素



横浜市立大学・三輪教授に聞く、アウェイ育児の実態と地域のつながりのこれから

アウェイ育児の実態：地域のつながりが重要になる子育てを機に、初めてアウェイに気づくケースも

子育てを始めるまでは、自分が暮らす地域にそれほど関心やつながりがなくても、子どもが生まれると、地域の施設やサービス、ご近所さん、ママ友など、身近な地域の存在に少しずつ目が向くようになってきます。そうしたなかで、子育てをきっかけに、周囲に知っている人がいない、頼れる場所も分からないというアウェイな状況に、初めて気づく方もいるのではないでしょうか。

さらには、少子化の影響で、自分の子どもと同世代の子どもを近所で見かけづらくなっています。特に未就学児の場合、通う保育園や幼稚園が異なり、意識していないと同じ地域に暮らしていても親同士が顔を合わせる機会が少ないという難しさもありますね。

「行ってもいい」と思える場所が複数あることが「心の保険」に

地域に公園や子育て支援施設だけあっても、必ずしも親子が安心して過ごせる場になっているとは限りません。場所と人は密接に関係しており、そこがどんな場所か、どんな人がいるか、誰と出会えるかも、その場所を利用したいという思いにつながりますし、「困った時に話を聞いてくれる人」「同じ悩みを共有できる人」がいたり、「自分がほっとできる場所」「子どもも楽しく過ごせる場」であれば自然と安心できる心の拠り所（居場所）になっていきます。さらには、実際に頻繁に利用していなくても、そう思える居場所があること自体が、子育て中の親にとって「心の保険」になりますし、そんな場所を一つに限らず、遊びたいとき、相談したいときなど、その時々の状況に応じて選べるように、選択肢をたくさん持てていることも大切です。そして、地域のさまざまな場が親子の居場所としてゆるやかにつながり、必要なときに連携できる環境があれば、そこに暮らす親子にとってより安心できる地域になるでしょ

「いざというときに頼れるかどうか」は日常の関係の延長線上にある　まずは挨拶から始めてみよう

今回の調査では、「30分以内なら配偶者・パートナー以外を頼りたいと考える人」が約半数いる一方で、約4割は実際に頼りやすい距離に頼れる相手がいないと回答しました。そもそも顔見知りになるきっかけがないという人も過半数を占めていますが、子育ての悩みを相談したり、子どもを預けたりする頼れる関係は、突然生まれるものではなく育むものでもあります。そこで顔見知りになる第一歩として実践してみてほしいのは、身近な人への挨拶です。まず挨拶を交わし、顔見知りになり、お互いの様子を少し気にかける、そうしたステップで徐々に深まっていくものではないかと思います。相談できる、いざというときに頼れるといった関係も、挨拶から始まる日常の小さな関係の延長線上にあるのだと思います。

目指したいのは「頼れる」ではなく「頼り合える」関係　子育て世帯だけでなく地域全体で育むつながり

頼る相手がいないと言われるアウェイ育児ですが、「頼る」とは一方的なものではなく、互助の関係の上に成り立ちます。もちろん、何かしてあげなければ人を頼ってはいけないということではありません。いつか自分にもできることがあれば力になりたいと思う恩送りの気持ちを持ち合い、日頃から互いに関心を向けることが、信頼関係を育む土台になると思います。

そして、地域でのつながりづくりは、子育て中のパパ・ママだけが頑張るものではありません。地域に暮らす人たちが、互いに少しずつ地域の子どもに関心を持つことも大切です。例えば、自分の家の近所に、顔と名前が一致する子どもはどのくらいいますか？地域の全員がすべての子どもを知る必要はなく、それぞれ身近な子どもを少し気にかけるだけでも、親子にとっては自分たちを知ってくれている大人がいることになります。子育て世帯に限らず、互いに少しずつ関心を寄せ合い、挨拶をかわす。そんな日常の積み重ねが、子育て世帯に限らず地域の人々にとっても、安心して暮らしやすいまちにつながるのではないでしょうか。



三輪律江さん（ミワ・ノリエ）

横浜市立大学 大学院 都市社会文化研究科 都市社会文化専攻 教授

(株)坂倉建築研究所、横浜国大を経て2011年4月より横浜市大に着任。「子ども」と「まち」との関係に着目した実践的調査研究を数多く手掛け、複数の省庁や自治体で建築審査会、都市計画審議会、住宅政策審議会等の委員の他、子育ち支援やまちづくりNPOの理事等も務める。代表編著に『まち保育のススメ（萌文社）』『子どもまちづくり型録（鹿島出版会）』『こどもまんなか社会ってなんだろう（ミネルヴァ書房）』他。専門は建築・都市計画、参画型まちづくり、こどものための都市環境、環境心理学。